

卓 話

平成 20 年 2 月 5 日

『 国 際 奉 仕 に つ い て 』

国際ロータリー第 2630 地区 青少年交換委員会
委員長 中村 盟 様

1929 年、コペンハーゲン・ロータリークラブが始めた青少年交換プログラムは、年々各国で盛んになり、1972 年には正式に国際ロータリーのプログラムとして認証されました。

現在では日本を含め全世界 80 カ国、毎年 7,000 名以上の学生が参加するまでに成長いたしました。
その中の約 1 割に当たる 600 余名が日本全体の留学生の数であり、2630 地区の実績は 34 地区内で常に首位を誇っています。



第 2630 地区の青少年交換委員会は 40 年の歴史があり、今日までに 800 有余名の留学生を派遣し、同数の受け入れをしています。40 年前、岐阜から 1 人の留学生が不安と期待に胸を弾ませてオーストラリアの地へ向かい、その後、両国の青少年委員会のたゆまぬ尽力が身を結び、今日では多数の留学生が行き交うようになりました。派遣先も、現在オーストラリア、アメリカ、フランス、スウェーデン、ノルウェー、タイ、マレーシア、台湾など多数の国々との交換をしています。

異文化の国で言語、生活習慣、価値観の相違などの中での一年間は、大変な事であり実体験をした者でなければ理解できない事もあり、それを乗り越えた者には大きな自信となり、それからの人生に役立つものと思われます。

現ロータリアンの中にも、交換留学生として海外に留学された方もかなりいます。異文化交流で培われた体験が国際理解につながり国際親善に国際平和に結び付く事が青少年交換事業の目的であります。

数ある素晴らしい体験談には、枚挙にいとまがありません。つい先日あった心暖まる事例を紹介します。突然 1 月に来日する事になったオーストラリアのナット・イーストメント君は、母が 30 年前に交換留学生として来日し、2630 地区の四日市北クラブで 1 年間お世話になったそうです。

彼は、幼い頃から母の日本での留学体験の話聞き、自分も高校生になったら是非とも憧れの日本に、しかも、母が過ごした四日市北クラブに留学したいと強く望んでいたそうです。

ところが 3 年前に母は亡くなり、更に日本への留学が募り、選考の時期が遅れたが何とかならないものかと、オーストラリア地区から問合せがきました。

3 年前に亡くなった母と息子の 2 代にわたる思いを、何とか実現してあげる事ができないかと四日市北クラブの佐野会長さんや中村元地区青少年交換委員会委員にご相談申し上げました。

期の半ばで、クラブ予算、委員会事業をはじめ関係者の皆さんには大変な事で果たして受けていただけるかどうか心配をしました。翌日の昼過ぎに佐野会長より快諾したとの連絡を受けました。

会長をはじめクラブの皆さんの懐の深さと、青少年交換プログラムに対するご理解に深く感謝をした次第です。

親から子へ、子から孫に、このような息の長い青少年交換事業が他のクラブにおいてもあります。クラブとクラブ、地区と地区、国と国が留学生の交流により、理解を深める事になり、国際親善、国際平和につながっていくのではないのでしょうか。

各クラブの皆様には是非ともこの事業に参加をいただきまして、優秀な学生を留学させることに、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

以上